平成21年度卒業式学長式辞（平成22年3月25日）

本日、ここに学士の称号を得られた皆さんを迎え、平成21年度卒業式を執り行うことができますことは、埼玉大学全体の喜びとするところであります。

本年度の卒業生は、教養学部205名、教育学部497名、経済学部351名、理学部185名、工学部419名、合計1,657名であります。この中には、祖国を離れて埼玉大学に留学し、学業に励んできた方が38名含まれております。また、経済的困難や病気を抱えながら、並々ならぬ努力によって今日に辿り着いた人も少なからずいます。皆さん、ご卒業、本当におめでとうございます。また、長年にわたってご子息の勉学を支えてこられたご家族の方々に対しましても、これまでの御労苦に敬意を表するとともに、心からお祝いを申し上げたいと存じます。

さて、皆さんのなかには大学院に進む人もいるでしょうが、大多数の人は今日を境に社会の現場に出て、新しい生活を始めることとなります。いずれにせよ、皆さんはそれぞれに、これからの人生への決意を固めようとしていることでしょう。

そこで、私は、これからの時代にどういう生き方をしてほしいか、について所見を述べ、皆さんを送り出す言葉にしたいと考えます。

まず、これからの時代とはどういう時代かについてお話ししましょう。皆さん、この1年半の間に起こった二つの政変を思い起こしてください。言うまでもありません。その1つは、一昨年11月、民主党のバラク・オバマが　we can change. と言って、アメリカ合衆国史上最初の黒人大統領に選ばれたことであり、もう一つは、昨年9月、鳩山連立政権が成立したことです。日本の総選挙で野党が単独過半数を獲得し、政権交代が行われたのは戦後初めてのことでした。

この2つの政変は、人々に明るい希望を抱かせてくれるものでした。オバマは就任してすぐ「グリーン・ニューディール」戦略を打ち出し、前大統領のブッシュが強引に戦争を仕掛けて泥沼化したイラクから撤退することを表明し、また核兵器廃絶の意思を示しました。他方、鳩山政権は「コンクリートから人へ」への政策転換、官僚主導から政治家主導の政治への転換と言って、多くの人に、これで日本の政治が変わるかもしれない、と思わせてくれました。新しい時代を切り開く可能性のある、歴史的転換期に入ったのです。

しかし、オバマ政権も、鳩山連立政権も、スムーズな政策の実現を妨げる複雑な現実に直面しています。また、これで本当に政権交代が起こったのかと疑わせるような面も出てきました。

皆さんの中には、こういう事態の進行を見て、幻滅を感じている人も少なくないと思いますが、今後政権がどうなろうと、動き出した歴史の歯車が逆戻り

することはありません。地球温暖化、生態系の危機、地球人口の急激な増加、貧富の差の拡大、水と食料の分配の不均衡、核兵器の蓄積とその分散など、解決が求められている地球規模の課題は未解決のまま残されています。日本では一昨年来の経済危機がいまだに続いています。

こういう歴史的転換期にあって、既存の組織、既存のシステムの綻びはもはや隠せなくなっています。「滅私奉公」という言い方がありますが、自分の身を預け、自分を殺して「奉公」すれば「安心」が得られる、そういう組織はもはや無いと考えた方がいいでしょう。私たちは、持続可能な21世紀社会に向け、あらゆる組織、あらゆるシステムを見直し、社会の在り方を再デザインしなければなりません。

卒業生の皆さん。そういうわけですので、皆さんは、短期の動向に一喜一憂するのではなく、何十年に一度という大きな歴史的転換期に、新しい人生を歩み始めるということを是非自覚してもらいたいと思います。そして、私が皆さんにその役割を引き受けてもらいたいと願うのは、「変革の担い手」としての役割です。皆さんが今後どこで働くことになるにせよ、生活の拠点をどこに構えることになるにせよ、これからはその場、その場で「変革の担い手」が必要とされてきます。その役を自分から進んで引き受けるような人間になってもらいたいのです。

これまで親の愛情に守られて育ってきた皆さんは、困ったことがあれば「誰かにやってもらおう」、という思考・行動様式がある程度許されてきました。しかし、そろそろ、そういう他者依存の思考・行動様式から卒業しなければなりません。「変革の担い手」としての役割を引き受けるということは、そのことが前提になっているのです。

もっとも、他者依存の思考・行動様式は、もう少し根が深いと言わなければなりません。というのは、長らく高度消費社会の住人という在り方に染まってしまった私たちは、問題が大きいほど、それを生み出す組織とシステムの変革を他人の手に委ね、自分はその果実だけを享受するという思考・行動様式に陥る危険があるからです。もちろん、期待が裏切られた時は、異議申し立てという行為に出ることはあります。その先端的な行為者として、生活の場でも、教育の場でも、いまクレーマーが増えています。たしかに、政治に対して、行政に対して、学校に対して、あるいは企業に対して苦情をぶつけるという行為は、サービスの質を向上させるために必要な行為の一つといっていいかもしれません。しかし、私たちがそういう行為に終始していては、いつしか税金を払って、あるいは料金を払ってサービスを受けるだけの、単なるサービスの受益者、サ

ービスの消費者という存在に自分をおとしめることになります。高度なサービス社会には、このように市民を受け身化させる危険があるのです。この時代の転換期に、変革の責任を誰かに押しつけ、問題が起こればいずれ誰かが是正してくれるだろうと待っていると、それは裏切られても仕方のない空しい期待に終わるでしょう。

ここで私は、鳩山首相が昨年10月の臨時国会の所信表明演説で掲げた「新しい公共」に触れておきたいと思います。この「新しい公共」という概念の意味するところは、日本では「新しい」ということであり、そこで言われている「公共」という概念そのものには新しさはありません。というのは、「公共」という用語自体は、とても長い歴史を負った言葉だからです。人々の行動や組織の活動が、社会的な文脈に置かれるとき、そこに「公共性」というテーマが発生することは、ある意味で当然なことです。ところが、日本では、伝統的な「おおやけ」の観念が社会に浸透し、その結果、「公共」なるものは国家や官僚によって独占されてきました。鳩山首相が先ごろの有識者の円卓会議の会合で「これまで『公』と言うと、すべて『官』が賄うという話だった。『民』と協力することでもっと満足、幸せが得られる社会が築ける」と述べていますように、彼の所信表明演説には過去に対する反省が含まれています。今必要な「公共」とは、この十数年の間に盛んになってきた『公共哲学』の研究で言われてきているように、生活世界に密着した「市民的公共」とでもいうべきものです。そうした「公共」は、鳩山政権が続くとか、続かないとかに関わりなく、皆さんが「変革の担い手」となり、様々な場で、様々な問題の解決を目指して、多くの人と協力し合いながら行動するなかから、日本の社会の中に紡ぎあげられるものと言わなければなりません。人々のそういう営みの積み重ねが、社会を変え、時代を転換する原動力となるのです。私が皆さんに「変革の担い手」としての役割を果たしていただきたいと言うことのうちには、そうした大きな意味が込められているのです。

以上、私が卒業生の皆さんに期待するところを申し上げましたが、卒業したばかりの皆さんには、或いは、重すぎる話に聞こえたかもしれません。しかし、この時代の転換期に、厳しい社会に出て行くためには、最初が肝心です。最初に覚悟して、覚悟しすぎることはありません。また、埼玉大学に学んで身につけた「知」と「技」は、皆さんがそうした「変革の担い手」としての役割を果たす際に大きな力となるはずです。皆さんならできます。どうか自信を持って、前に進んでください。

ここで中国の古典『孟子』にある有名な言葉を、皆さんに紹介したいと思います。

「為す事ある者は、辟えば井を掘るが若し。井を掘ること九軔、而も泉に及ばざれば、猶お井を棄つとなすなり」

守屋洋氏の現代語訳を借用しますとこの言葉は、「仕事をなしとげるのは、井戸を掘るのと同じようなものだ。いくら深く掘っても、水脈に達しないうちにやめてしまったのでは、井戸を捨てたも同然である」という意味です。皆さん、どこにも困難はありますが、簡単にギブアップしないでください。「大概の困難は乗り切るためにある」というくらいに考えて、初志を貫く努力をお願いします。でも困難が大きすぎて、どうしても乗り越えられない。そういう時は、本日皆さんの母校になりました埼玉大学に戻って相談してください。卒業生の皆さんなら、埼玉大学はいつでもウェルカムです。

さて、昨年度の卒業式から、埼玉大学は皆さんのために特別講演を設けました。本日は、長らく埼玉大学の研究をリードし、定年退職後も特任教授として埼玉大学で研究を続けていただいている伏見譲先生に、特別講演をお願いしております。皆さんの記憶に残るような、すばらしいお話をしてくださると思いますので、期待してください。

最後になりましたが、皆さん一人一人の将来が幸運に恵まれ、それぞれに悔いのない人生を送られることを祈念して、私の式辞といたします。本日はおめでとうございました。

平成22年3月25日

埼玉大学長　上井喜彦